orinas

オリナス

京都大原記念病院グループ 広報誌

vol.3 ／ 2021.08

心によりそい、人をささえて40年。グループ創立40周年 記念号

Kyoto Ohara Memorial Hospital Group

京都大原記念病院グループは創立40周年を迎えました。

京都大原の地で一歩を踏み出して40年。
医療、介護の現場で一人ひとりの想いの積みかさねが
京都大原記念病院グループ（以下、グループ）を形づくりました。

グループの現在（いま）を担う現場スタッフに日々、大切にしている想いを掲げてもらいました。

医師
垣田 清人

ケアマネジャー
南部 木綿子

看護師
杉政 秀樹

作業療法士
杉本 大輔

介護福祉士
矢野 遥菜

管理栄養士
山田 采奈

心によりそい、
人をささえる。

人生背景、それぞれの価値観。その人らしい生き方によりそい、ささえていく。これまで創りだした様々な価値はすべて、その想いから生まれたもの。誰もが、生涯にわたり不安なく暮らすことができるように。誰もが、生涯にわたりご自分らしく輝き続けられるように。時代の変化に応じた在り方を、これからも。ふり返ると、いつも想いはここに。

医療ソーシャルワーカー
森 麻衣子

理学療法士
継田 貴大

看護師
大村 紗希

介護福祉士
松本 皓一郎

放射線技師
内田 容平

言語聴覚士
石井 絢子

医師
岡 伸幸

臨床検査技師
古屋 裕子

心によりそい、人をささえる。

40th since 1981

京都大原記念病院グループ

人が人をつつみこむ、心によりそう想いを形にしたグループのロゴ。これからも変わらない想いを、途切れることのない安心・喜び・希望の輪で包みました。色は、まごころこめて多様に働く一人ひとりの職員を意味します。

40周年記念
特設サイトを
是非ご覧ください

https://kyotoohara.or.jp/40th-anniversary/

京都大原記念病院グループ 40年の歩み

創立以来、向き合い続ける「時代はどのように変化し、人は安心のために何を求めるのか」という視点。一貫して人に安心を提供するために、時代の変化に応じたあり方を模索し続けてきた歩みの転換点をご紹介します。

第1章 リハビリテーション

治療が終わっても受け入れ先がなく入院を続ける「社会的入院」が課題となる中で着目したのが、脳卒中などの後遺症を抱える患者様に集中的な訓練を実施し、社会復帰をサポートする「リハビリテーション（以下、リハビリ）」です。1984年に初めて理学療法士を採用、2000年には制度化と同時に京都府内で初めて回復期リハビリ病棟を設置しました。

第2章 医療・介護・福祉〝三位一体〟

「手術を終え、医療と自宅の狭間の時期にいる患者様がそのまま病院にいることは、本当に良いことなのか」の問題意識のもと、グループは、「介護老人保健施設 博寿苑（1991年）」「特別養護老人ホーム大原ホーム（1997年）」を、病院と同一敷地内に開設。医療・介護・福祉の〝三位一体〟で安心を提供する全国的にも珍しい施設群が誕生しました。

第3章 在宅サービス

「施設に来られる方には、どうしても遠慮がある。本来、家庭の中でないと利用者や家族の本音を聞くことはできない。」「博寿苑デイケア（1992年）」を皮切りに、在宅サービスを展開。医療・介護のワンストップショップ「京都総合ケアステーション（1998年）」では24時間体制の相談窓口、生活支援サービスも開始。その後の展開につながる、高齢者の本音に触れました。

第4章 安心して最期まで暮らせる住まい

病院や施設を出た後も安心して過ごせる高齢者住宅の試行も重ねました。「ぬくもりの家（1996年）」、「大原うぐいすの里（1999年）」です。小規模の住宅に訪問診療や訪問看護・介護・リハビリ、配食などを提供し、ノウハウを蓄積しました。「ケアハウスやまびこ（2002年）」「ライフピア八瀬大原一番館（2006年）」へ継承されています。

地域に初の医療機関として「大原記念病院（当時）」を開設。記念の文字がその名に刻まれた。

開設前。無医村だった頃の大原。

第5章 京都から全国への発信

通院でリハビリを専門に提供する「御所南リハビリテーションクリニック（2013年）」を開設。地域医療の効率化が求められるなか、急性期病院を退院後、早期段階から受け入れる拠点として「京都近衛リハビリテーション病院（2018年）」を開設。3拠点連携のもと、リハビリや医療・介護体制のあり方を全国に発信し続けています。

第6章 誰もが安心して暮らせる社会へ

いつまでも自分らしく過ごせる社会構築に向け、内閣府、京都府の共同補助事業「大原健幸の郷」がスタートしました。リハビリの経験に基づくプログラムで健康を支え、また交流拠点として地域活性化への貢献を目指します。サービスの原点は「人の心に寄り添い不安を取り除くことにある」との認識のもと、これからも社会の要請に応えつづけます。

高齢社会に見合う医療を

創立40周年に思う ――

児玉 博行
Hiroyuki Kodama

京都大原記念病院グループ代表

昭和23(1948)年、和歌山の蚊取り線香製造元(南洲香)の老舗商家に生まれる。昭和48(1973)年、京都府立医科大学を卒業、同大附属病院第一外科に入局。社会保険神戸中央病院(兵庫)、西陣健康会堀川病院(京都)、国立鯖江病院(福井)などに勤務。昭和56(1981)年、京都洛北の景勝地、大原の里に大原記念病院(当時)を開設。

京都大原記念病院グループは、児玉代表が前身の病院を開いて以来40年。今ではリハビリテーション専門病院として京都のみならず広く知られるようになりました。まずリハビリを手掛けるようになった理由から教えてください。

児玉博行代表(以下、**児玉**) ――1981(昭和56)年に当時無医村だった大原の地に病院を建てました。私は外科医ですが、実際に病院経営を始めてみると、医療は当初思った以上に国による規制が多い業界であることも分かりました。そこで外科よりもリハビリを核とする制度ビジネスを志した次第です。

きっかけは何だったのですか。

児玉 ――86年だったと思います。「成熟社会から高齢化社会へ」という日本経済新聞の元日特集がヒントになりました。高齢化で人口動態が変化するなら、それに見合う医療が必要になります。そこで急性期医療と高齢者医療の狭間である回復期を担うリハビリ医療に着目し、事業展開を思い立ちました。その後オーストラリアなどの海外事例も学ぶ一方、国に政策提言を重ね、2000年になって回復期リハビリ病棟が制度化されました。制度からはみ出たニッチ(すき間)市場を見つけるのが私のやり方の基本ですが、私自身も団塊世代の一人で、高齢者になるころには問題が深刻になるとの認識が、当時から実感としてありました。

組織を維持するうえで必要なことは何だと考えますか。

児玉 ――事業はヒト・モノ・カネで成り立っています。レビューしてリセットしながら新しい態勢で物事に臨むことが必要です。つまりは、組織の垢や余計な物を取り除き、マンネリ化を防いで職員にフレッシュな状態でサービスに当たってもらうこと。それによって患者様やご利用者に質の高いサービスが提供できると考えています。そのためには常に組織の中に課題を見つけ新しいことに挑戦する。それが私の哲学の一つです。

今後はどんな事業展開を考えていますか。

児玉 ――国民の金融資産は2000兆円近くあって、60歳以上の人がほとんどを持っています。この層の求めるものを掘り起こすことによって眠っていた資産が世の中に循環され、日本経済にも貢献できます。

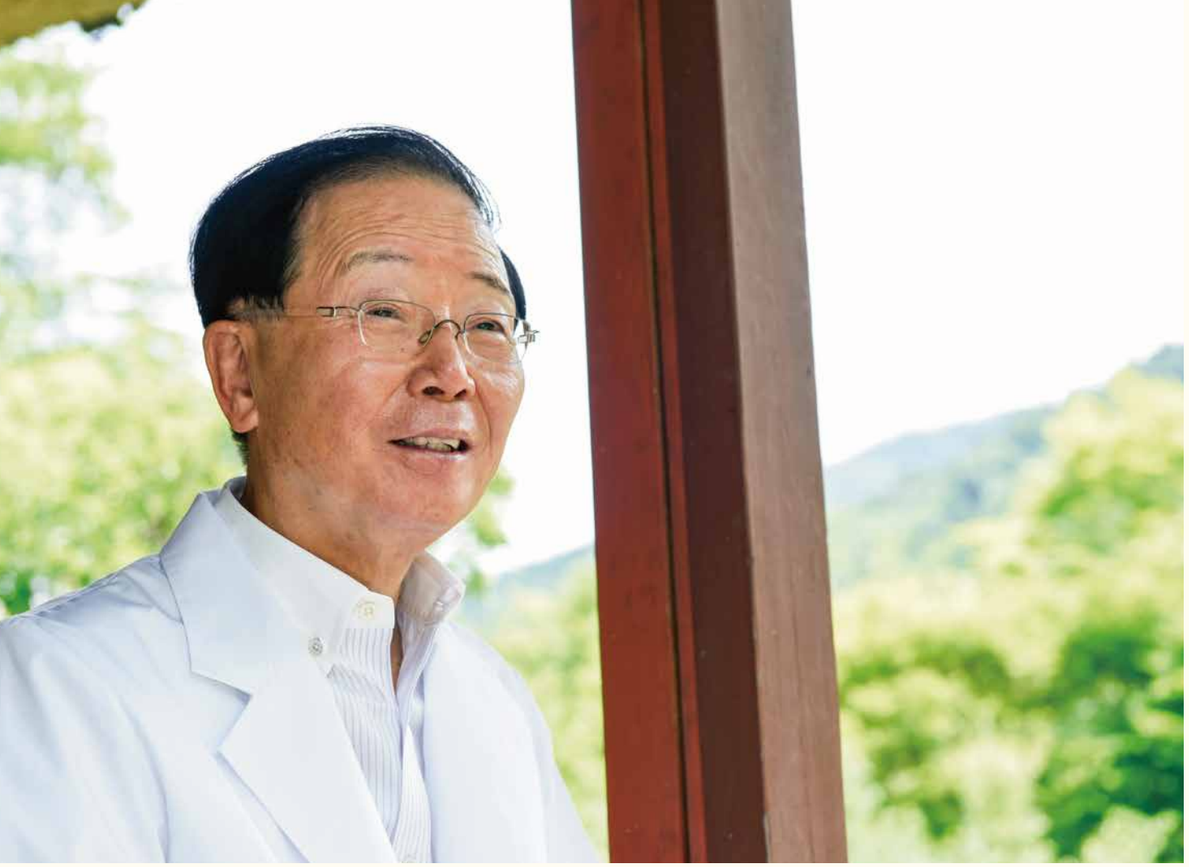
そこで模索しているのが、いわゆる「メディカルマンション」。高齢層には衰え行く健康への不安は常にあります。しかし病院は基本的に治療の場であって生活の場ではありません。医療が完備され、適度の贅沢を楽しめて尊厳を守ってくれる、自宅に代わる最期の場としての生活空間には強い需要が見込まれており、従来にない高品質のものを世に出すにはどうすればいいか、折りに触れて考えています。

職員にはどう感じていますか。

児玉 ――患者様やご利用者には評判が良く、現場の職員が提供するサービスの質には自信を持っています。その意味では感謝しかありません。たださらなる事業の展開に向けては、マネジメント能力を持った人材の育成が急務と考えています。

最後に、あらためて今の気持ちを聞かせてください。

児玉 ――よく死なずに来たなあ、というのが正直なところ。銀行には何度も門前払いされ資金に窮したことや、業界の秩序に従わず無頼漢呼ばわりされたこともありました。グループの拡大に際しては、亡妻(児玉英理子・元大原ホーム施設長)が「アンタは思いついたらすぐやってしまうし、軌道に乗ったらすぐ他のことに目移りする。一つ一つの取り組みにもう少し値打ちを持たせたらどうですか」と、あきれながらもアドバイスしてくれたものです。患者様・ご利用者や職員から官庁・財界の方々に至るまで、多くの良い出会いに恵まれて今があります。幸せだったと思います。



心によりそい、人をささえる。

40th since 1981

京都大原記念病院グループ

orinas
オリナス
について

患者様、ご利用者、ご家族の心に寄り添い不安を取り除くために、職種や組織、医療や介護の枠にとらわれず、人や地域と織りなすつながりのなかで生まれる様々な場面を季節ごとに紹介します。

お問い合わせ

TEL／075-744-3121（代表）
FAX／075-744-3126
MAIL／kouhou@kyotoohara-gr.jp

WEB

Facebook